京都大学	博士 (法学)	氏名	須藤 健一
論文題目	橋川文三の政治思想——中間者の眼		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、戦後政治学・政治思想研究に独自の足跡を刻みながら、これまでその全体像が明らかにされてこなかった橋川文三 (1922~83) の政治思想を、三島由紀夫・丸山眞男・柳田国男の三者との比較・対比という視座から、総合的・包括的に解明することを目的とする。第一章では戦後日本を代表する小説家三島由紀夫との、第二章では戦後政治学をけん引した丸山眞男との、第三章では独自の民俗学を創始した柳田国男との影響関係が検討され、橋川の政治思想の展開および独自性が明らかにされる。</p> <p>第一章「三島由紀夫との論争と共感と」では、まず第一節「三島の橋川評——社会科学の領域で唯一の見事な文体の保持者」において、ともに戦中の少年時代に保田與重郎の日本浪漫派の思想に感化された経験をもつ三島と橋川の交友関係と、三島が橋川の批評眼を高く評価していたことが明らかにされる。第二節「共感——主として古典主義者三島に対しての」では、橋川も三島に世代的な共感を抱き、かつ三島文学を高く評価していたものの、同時に橋川が、「死」の観念と結びついた「突破の思想」への三島の囚われを洞察していたことが明らかにされる。第三節「論争——「文化防衛論」批判」では、三島の政治思想的著作「文化防衛論」をめぐる二人の論争が検討され、美の論理と政治の論理を同一化して近代的政治を突破しようとする三島の美的政治の理念を、橋川が明確に批判するに到っていたことが、明らかにされる。第四節「止揚——三島の自我と橋川における突破の思想の克服」では、1970年11月に三島が自衛隊市ヶ谷駐屯地に突入して自死を遂げた後に書かれた橋川の論考群の検討をつうじて、橋川が、三島の美的政治の理念と「死の共同体」というロマン主義的観念とを関連付けるとともに、そうした美的な「突破の思想」を、近代的な政治の論理とは相容れないものとして批判、克服する見解に到達していたことが、明らかにされる。</p> <p>第二章「丸山政治学との緊張的關係・批判的対決」では、まず第一節「丸山の橋川評——現実政治に係る関心及びセンスの欠如」において、橋川を政治学の世界に引き入れた師の丸山眞男が、橋川の『批判序説』を傑作と評価する一方で、橋川の現実政治に対する関心及びセンスの欠如を痛烈に批判し、『批判序説』以外は評価すべき業績に乏しい橋川、という通俗的な橋川評価に影響を与えたことが明らかにされる。第二節「自己批判及び丸山政治学への懐疑としての『日本浪漫派批判序説』」では、橋川の名を世に知らしめた『批判序説』が、丸山政治学から摂取した理性的な思考法を活かした成果であるとともに、丸山の「軍国主義者の精神形態」のパラダイムでは保田の浪漫派的精神を捉えることができないという懐疑の所産でもあったことが、明らかにされる。第三節「「昭和超国家主義の諸相」での明示的対決」では、吉本隆明の丸山批判の問題意識を引き継いだ橋川が、「昭和超国家主義の諸相」において、日本ファシズムの病理を国家がとめどなく肥大化する「「超国家」主義」として捉える丸山ファシズム論を明確に批判し、日本ファシズムを国家それ自体を超えていく「「超」国家主義」として捉える新たな視座を確立したことが、明らかにされる。第四節「丸山の「政治」と橋川の「政治」——近代的政治概念の再検討」では、政治を権力・正統性・技術・倫理という各契機の結合体と捉え、具体的現実の中で次善の選択を果たす「可能性の技術」(ビスマルク)と見なす丸山の近代的な政治概念に対し、橋川の政治概念が、そうした近代的な政治概念を踏まえつつも、絶対者の探求、美的象徴と自己表現といった契機を含むものであり、またそこに、「突破の思想」と「保守の思想」の両義性に立とうとする橋川政治</p>			

学の特質が示されていることが、明らかにされる。

第三章「柳田民俗学への眼差し——日本における保守主義の模索」では、まず第一節「柳田の伝記研究——その文学的感性及び詩人的資質への注目」において、橋川が、文学的資質に恵まれた柳田の創始した民俗学を、過去から未来に向かう一国総体の幸福をめざす政治学と見なしていたことが明らかにされる。第二節「柳田の地方改良運動批判を巡って——日本近代批判の諸相」では、橋川が、明治期の地方改良運動に対する柳田の批判のうちに、中央集権的・合理主義的統治の病理という日本近代の負の側面をえぐり出す視座を見いだしていたことが、明らかにされる。第三節「柳田の保守主義——日本における保守主義の模索」では、過去・現在・未来を一体的に把握する柳田の思考に、自らが依拠すべき「保守の思想」を見いだし、それによって「突破の思想」を最終的に克服し、人間性ならびに人間が形成する歴史への信頼という視座に到ったことが明らかにされる。

終章「橋川文三の政治思想——中間者の眼あるいは突破の思想と保守の思想の両義性」では、第一～三章の考察を踏まえ、三島の「突破の思想」との対決から、丸山政治学との交錯をへて柳田の「保守の思想」に到った橋川思想の思想遍歴が跡づけられるとともに、にもかかわらず、晩年の橋川が西郷隆盛論等においてふたたび「突破の思想」への共感を示していたことが指摘され、「突破の思想」と「保守の思想」の両義性にとどまる「中間者の眼」こそが、橋川文三の政治思想の独自性であったことが示される。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、戦後日本の政治学および政治思想史研究に独自の足跡を刻み、評伝や文学批評に及ぶ領域横断的な文筆活動で知られる橋川文三（1922～83）の政治思想を、三島由紀夫・丸山眞男・柳田国男という、それぞれ戦後日本の文学・政治学・民俗学において傑出した業績を遺した三者との思想的交錯という視座から、包括的に解明することを試みた力作である。

本論文の第一の意義は、『日本浪漫派批判序説』をはじめとする優れた業績で知られながらも、これまで常に師の丸山眞男の影に隠れるかたちで必ずしも正当な評価を受けてこなかった橋川文三の政治思想の全体像を、橋川がそれぞれに深いかかわりをもった三島文学・丸山政治学・柳田民俗学との比較対照を通じて、立体的に明らかにした点にある。著者によれば、戦中に保田與重郎の浪漫主義に感化された経験をもつ橋川が、近代日本の隘路を美的行動主義によって突き抜けようとする三島文学の「突破の思想」に心惹かれつつも、近代主義的立場から日本ファシズムの病理を剔抉する丸山政治学との格闘を経て、最終的には、常民の営為の歴史性に定位する柳田民俗学の「保守の思想」により「突破の思想」の陥穽を克服するに至ったのである。

本論文の優れた点として、第二に、如上の理路を論証するために、橋川の主要著作群は無論、未公刊の草稿や書簡、さらには蔵書中の書き込みにまで及ぶ膨大な資料を調べ上げ、精緻な読解を施している点が挙げられる。あわせて三島・丸山・柳田の著作群や、彼らと橋川との影響関係に論及した大量の二次文献を渉猟した本論文は、いわば橋川文三の百科全書として今後の橋川研究の礎となるばかりでなく、橋川というユニークな思想家を軸とするユニークな戦後日本精神史研究ともなっており、政治思想史研究および隣接諸分野に重要な貢献をなすものとして高く評価できる。

もっとも、本論文にも問題点がないわけではない。橋川という言葉に忠実に寄り添おうとするあまり、概念や論理についての検討が十分でないと思われる箇所が散見され、橋川が政治思想が内包する矛盾や齟齬を「両義性」という曖昧なレトリックで不問に付してしまっているきらいもあり、改善を要すると思われる。

とはいえ、これらの問題点は、必ずしも著者の責めに帰すべきものではなく、橋川政治思想という未開拓の研究対象に由来するもの、および著者の研究の射程の大きさに由来するものであり、本論文の価値を損なうものではない。

以上の理由により、本論文は博士（法学）の学位を授与するに相応しいものと認められる。

また、令和4年1月25日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した試問を行った結果合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降